

中世東国文書に見られる音韻交替表記について

川野 絵梨

はじめに

中世東国文書の一部として「越後文書宝翰集」(以下「宝翰集」)をはじめとする中世の越後(新潟)の古文書について言語分析を行ってきた^①。以下に見るように、その中で特に音韻の交替表記と思われる用例がいくつか見出され、現代の新潟方言との関連を考察してきた。本稿では、「宝翰集」の他に青森・岩手・福島などの東北地方と、埼玉や東京などの関東地方の古文書を分析資料として加え、越後だけではなく、東北地方も加えた広い地域に渡る中世の東国地方文書において音韻交替表記の例が見られるのかを分析していく。

【分析資料】

本稿では、東北地方と関東地方の古文書を中心に分析資料とした。分析には写真版と翻字を活用した。

東北… (青森・岩手) 南部氏関係資料

(『青森県史 資料編^②』)

(福島) 相馬文書・相馬岡田文書・大悲山文書

(『史料纂集古文書編 相馬文書^③』)

白河結城家文書

(『白河市史 資料編^④』)

関東… (埼玉)

武州文書

(『新編埼玉県史 資料編^⑤』)

(東京) 高幡不動胎内文書

(『日野市史 史料集^⑥』)

東北地方

○南部氏関係資料（以下は『青森県史 資料編 中世1南部氏関係資料』を参考にした。）

八戸（遠野）南部家文書

「八戸（遠野）南部家文書」という名称は、『青森県史』の解題に従っている。この「八戸（遠野）南部家文書」は、近世遠野一万二千石の領主であった遠野南部家（八戸家）に伝えられた文書で、明治時代に一部が遠野南部家から流出し、現在では以下のようになっている文書群である。

①南部光徹氏所蔵「遠野南部家文書」
（三二七点余）

②盛岡市教育委員会所蔵南部利昭氏旧蔵文書
（四七点）

③岩手大学附属図書館所蔵新渡戸文書
（三六六点）

④岩手大学附属図書館所蔵宮崎文書
（七点）

⑤原本所在不明文書（新渡戸・宮崎・斎藤文書の一部。四八点）

南部氏は、清和源氏（甲斐源氏）の一族の加賀美遠光の三男南部光行を祖とし、甲斐国巨摩郡南部郷を領して南部三郎と名乗ったのが始まりである。南部氏が北奥羽で本格的に活動を開始するのは、確実な中世の史料によれば元弘三年（一一三三）に北奥羽郡の国府支配の現地執行を担う重職に任ぜられて以降ということである。

○相馬文書（以下は『史料纂集古文書編 相馬文書』を参考にした。）

「相馬文書」は奥州相馬氏の本宗家である磐城（福島県）の旧中村藩主相馬氏に伝来した古文書である。

相馬氏は、桓武平氏の流れをくむ千葉氏の庶流の千葉介常胤の二男師常が下総国相馬郡（現在の千葉県北西部や茨

城(北相馬郡)に本領をもって相馬氏を称することからはじまる。文治五年(一一八九)の奥州平泉討伐に参戦して陸奥国行方郡(福島県南相馬市)を勲功の賞として与えられて以後、下総国相馬郡の本領とともに、陸奥国行方郡を代々相伝していくことになる。鎌倉後期に陸奥国行方郡に下向した師胤の系統が奥州相馬氏の本宗家として発展していく。

○相馬岡田文書(以下は『史料纂集古文書編 相馬文書』を参考にした。)

「相馬岡田文書」は、奥州相馬氏の有力庶子家である岡田氏に伝来した文書である。岡田氏は相馬胤村の二男胤顕を祖とし、陸奥国行方郡岡田村を領して岡田氏と称したという。「相馬岡田文書」の原本は、岡田氏の子孫にあたる東京都世田谷区在住の岡田幸胤氏が現蔵されている。

○大悲山文書(以下は『史料纂集古文書編 相馬文書』を参考にした。)

大悲山文書は奥州相馬氏の庶子家である大悲山氏に関する文書。大悲山氏は、陸奥国行方郡大悲山村(福島県南相馬市)を領した。鎌倉後期から南北朝期にかけての文書が中心で、所領に関する譲状や、南北朝期の内乱の動向を示す内容が主である。

○白河集古苑所蔵白河結城家文書(以下は『中世東国武家文書の研究』⁷⁾を参考にした。)

白河結城家文書は、白河集古苑(福島県白河市)が所蔵する文書である。白河結城氏は、陸奥国白河荘を本領とした一族で、もとは下総の結城氏の一族だったが、鎌倉後期に分立した。

本文書群は鎌倉期的那須氏関連文書二通と一〇〇通を超える結城宗広とその子親朝に宛てられた南北朝初期の文書群等から成る。このうち結城宗広宛の文書はすべて案文で、宗広宛の文書を息子親朝の右筆が記録として控えたものだと分かる。

関東地方

○武州文書（以下は『かながわの歴史文献55』⁶⁾を参考にした。）

武州文書は、文化七年（二八一〇）の昌平坂学問所地誌調所による『新編武蔵風土記稿』の編集の際の資料として、武蔵国内の鎌倉時代から江戸時代初期にわたる約一四〇〇通の古文書を影写した古文書集である。近世の書写本であるが、文書中の年紀表記に従い関東の中世文書として分析資料に加えた。

○高幡不動胎内文書（以下は『日野市史 史料集』を参考にした。）

高幡不動胎内文書は、日野市にある高幡山金剛寺（高幡不動）の不動明王坐像の胎内（首部）に納入されていた六九通七三点におよぶ文書群である。内容は、南北朝初期に常陸の南朝方北畠親房軍を攻撃する北朝方高師冬に従軍した日野地域の武士であった山内経之が、戦地の下総山川陣から故郷の妻子に送った書状が主なものである。本文書群が不動明王坐像の胎内から取り出されたのは大正末・昭和初年であったらしいが、六〇年間ほど紐で束ねられたまま日の目をみる事がなかった。その後、昭和六〇年（一九六五）に東京都と日野市教育委員会による合同調査が行われ、『日野金剛寺（高幡不動）文化財調査報告』が刊行されるに至った。

一 母音の交替表記

1、iとeの交替表記

前稿で中世越後地方の古文書である「越後文書宝翰集」や「中条家文書」に見られるiとeの交替表記について分析と考察を行った。本稿では、分析資料に掲げた東北と関東地方の古文書を中心に分析を行う。最初に現代方言に見られるiとeの交替例について見ていく。




現代方言で確認される母音iとeの交

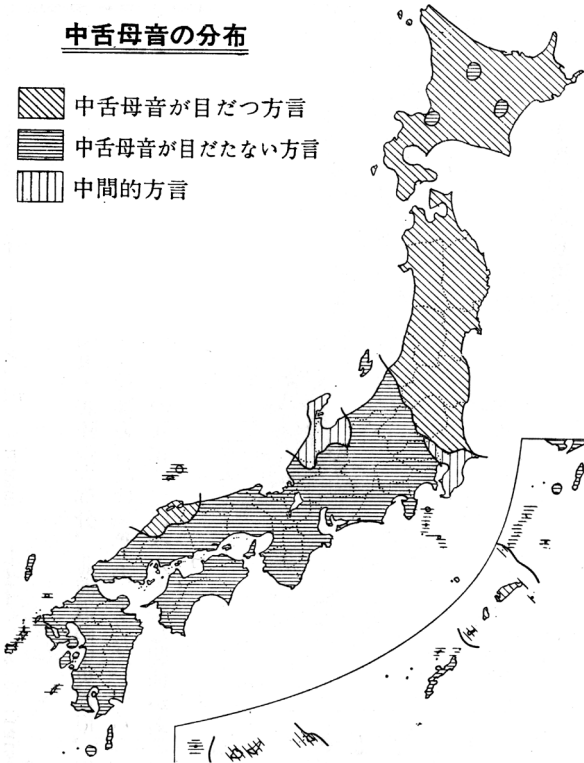
替例

音韻の面から全国の方言を見た場合、日本列島を日本海側（北）と太平洋側（南）のように南北に分ける方法がある。（古くは裏日本方言・表日本方言・薩隅式方言の三つに大別された⁹⁾。安部清哉氏には、音韻以外の語彙や文法の面からも日本海側と太平洋側で方言対立があることから、これらを南北型方言分布とした論考がある¹⁰⁾。

本稿で分析対象とする古文書が伝来した地域が含まれる東北六県と、「越後

中舌母音の分布

-  中舌母音が目だつ方言
-  中舌母音が目だたない方言
-  中間的方言



地図1 平山輝男『日本の方言』（講談社、1968年）

文書宝翰集」などが伝来した新潟県の北部は、先の音韻分布で示すと日本海側の方言の領域になるため、iとeの交替現象などがともに見られるのである。このように東北地方や新潟県北部などでは、iとeが区別のない一つの音韻として意識されているため、iとeが交替する現象が起こる地域として捉えられている。¹¹⁾

東北方言に見られるiとeの交替例¹²⁾

えか(烏賊)【青森】 えど(井戸)【岩手】 えま(今)【秋田】

えぬ(犬)【山形】 えど(糸)【宮城】 えわ(岩)【福島】

新潟方言に見られるiとeの交替例(該当箇所には傍線を付した。用例の表記は出典中のものに従った。)

○メ|メズ(みみず)、ア|メ|_(網)、タカエ|_(高い)、ベン|ポー(貧乏) 〔新潟県岩船群朝日村大字須戸方言¹³⁾〕

○『eia(板)、『eno(芋)、『esi(石)、『eto(糸)、ko『e(鯉) 〔新潟県南蒲原郡栄村大字尾崎¹⁴⁾〕

○え|きなり(いきなり)、え|びき(いびき)、え|じ(意地)、え|じわり(意地悪) 〔新潟県十日町市仙田地区¹⁵⁾〕

「みみず」や「板」のような名詞、「高い」のような形容詞、「貧乏」のような漢語に至るまで様々な品詞上でiとeの交替は起こっているようである。

右の例はiがeに交替している用例であるが、反対にeがiに交替している例は次のようなものがある。

チ(手)、オリル(折れる)、ダ|ミ|ダ(だめだ) 〔新潟県岩船郡粟島浦村字内内浦方言¹⁶⁾〕

本稿ではこれまでの論考を通して見られた音韻の交替表記について焦点を絞り、採録した用例について考察を行う。なお、「越後文書宝翰集」や「中条家文書」の用例に関しては前稿で指摘をしたので、本稿では主に東北と関東地方の古文書における音韻の交替表記について記述することとする。

最初に東北と関東地方の古文書中の i と e の交替表記を見ていく。

i ↓ e

東北

ひしやもんたうのちの事おほむかゑのうち
(巽 沙門堂)

かへくしからすと申少々可令進候
(命 甚長くむ)

南部氏関係資料(青森・岩手) から以上の二語を採録した。

「むかえ(向)」について

「むかい」の変化した語か。『うたたね』(阿仏尼・一二四〇頃)に「むかへの山を見れば、雲のいくへともなく折り重なりて」と用例がある。(『日本国語大辞典 第二版』) このように、越後や東北地方といった東国文書にのみ見られる語ではないものもあるが、今回は i と e の交替表記例として採録した。

e ↓ i

東北

いんないの村ゝといかりくら一所たかきの保内波多谷村
(飯 土 江 狩 倉)

やつうさきるゝといかりくら一所やかわら
(八 兎) (飯 土 江 狩 倉)

やつうさきるゝといかりくら一所雨上やかわら
(八 兎) (飯 土 江 狩 倉)

やつうさきるゝといかりくら一所雨上やかわら
(八 兎) (飯 土 江 狩 倉)

やつうさきるゝといかりくら一所雨上やかわら
(八 兎) (飯 土 江 狩 倉)

相馬岡田(貞治二年(一二三六三) 八月十八日 相馬胤家讓状)

相馬岡田(貞治二年(一二三六三) 八月十八日 相馬胤家讓状)

相馬岡田(康暦三年(一二三八一) 五月廿四日 相馬胤繁讓状)

相馬岡田(康暦三年(一二三八一) 相馬胤繁讓状)

「飯土江狩倉」という地名についての用例であるが、宛漢字が適当かどうかは検討を要する問題である。

ねんく十くわんからいとまい（唐系前卜）の御てらへよせへく候

陸中新渡戸（弘和二年（一三三二）二月廿一日 そへ置文案）

本来は「まへ（前）」だが、ここではiの音に交替した表記である「まい」となっている。

関東

そか（曾我殿カ）のものはやたち候よし申候又あまりに（乗替）のりかい（懸）の一きたにも候ハてと存候て

高幡（暦応二年（一三三九）山内経之書状）

右は東京都日野市にある高幡山金剛寺の不動明王坐像胎内文書の用例である。関東の文書にもe↓iの交替表記が確認出来た。現代の関東地方においてiとeの区別のない地域は、茨城や栃木にかけての関東の東北部、群馬の一部地域や埼玉県東部・千葉県の北部などである。⁽¹⁷⁾

以上見てきたように、iとeの交替表記の例が越後地方文書以外にも、東北地方と関東地方の古文書に見られることが分かった。これは、現代の東北や新潟方言に確認される中舌母音〔ɛ〕と同じような方言音が、このような表記となって現れたものではないかと思われる。

2、iとj uの交替表記

次はiの音がjuと表記された武州文書（埼玉）の例である。出典は『新編埼玉県史』⁽¹⁸⁾による。

武州大田庄（高岩）たかゆわい（高岩）ちまつり是なす

武州文書 十五埼玉郡（延文六年（一三六二）九月九日 市場之祭文写）

ここでは「岩」が「ゆわ」と表記されている。このような母音の i が語頭で「岩」「鱒」のようにワ行音に続くとき、ju の音に変化するのには現代の埼玉方言でも次のように見られる。⁽¹⁹⁾ 該当部分に傍線を付す。用例の表記は出典に拠った。

/ju'waɾi/ (岩) /ju'wai'i/ (祝ふ) /ju'wasi/ (鱒) /ju'ware/ (謂れ)

またこのような i から ju への変化は金田一春彦氏によれば「関東・奥羽はじめ東日本にかなり多い」⁽²⁰⁾ ようである。岩手県でも「鱒」や「岩」が [ju'wasi]、[ju'wa] のように発音され、⁽²¹⁾ 福島県でも同様の例が見られる。⁽²²⁾

以上のように現代の埼玉県や岩手・福島県などで見られる言語事象が、古文書の中にも音韻交替の表記として現れているのである。

3、i と u の交替表記

i ↓ u 次の用例は南部光徹氏所蔵遠野南部文書の用例であるが、「しまもり(島守)」の「し」が「す」となっており、「すまもり」と表記されている。同文書が伝わったのは現在の青森県東部から岩手県北部の地域であり、青森県では「シ・ス」は、「ス」に合体している。⁽²³⁾ このように現代の方言で確認される言語事象が、建武元年の古文書にも見ることができた。次に当該部分の写真を示す。○印は筆者による。

（島守 三戸郡南郷村）
すまもり公田百しやう六人所当分

南部(建武元年(一三三四)十一月五日 島守公田百姓分所散用状)



4、oとuの交替表記

o↓u 次はoの音がuに変化している例である。

東北

大わたむとむまくたの^{(本馬)(菅野)}

白河結城(康応二年(一三八九)六月九日 小峯政常讓状)

白河結城家文書は、白河集古苑(福島県)が所蔵する文書である。本来「もとむま(本馬)」となるべきところを「むとむま」と表記されている。現在の福島県方言にもこのようにoとuの音が交替する場合がある。右の白河結城文書に見られたようなm・nの後に続く鼻音化子音の例を示す。該当部分に傍線を付す。用例の表記は出典に拠った。

o↓u 「m」ムグス(漏らす) ムゲル(潜る) ムグロ(もぐら) 「n」ヌル(乗る) ミヌ(蓑)
u↓o 「m」モコ・モゴ(婿) モコウ(向こう) 「n」ノスム(盗む) ノマ(沼)

また青森県でもこのような例は見られるようで、「ノしむ(盗む)」、「モしろ(筵)」、「ムる(漏る)」などがある。

関東

武州き西こふり八十市祭之^(脚)

武州文書 十五埼玉郡(延文六年(一三六一)九月九日 市場之祭文写)

武州き西こふりかゝさねかふ道いちまつり^(脚)

武州文書 十五埼玉郡(延文六年(一三六一)九月九日 市場之祭文写)

武州文書には「こほり(郡)」が「こふり」となっている例が見られた。ここでは八行のoからuへの交替である。現代の埼玉方言において類例は見出せていないが、同じ関東地方の栃木、群馬方言からoからu、またはuからoへの交替例が見られた。該当部分に傍線を付す。用例の表記は出典に拠った。

栃木 asū kū (あそぐ) asū bū (遊ぶ)
群馬 フルシキ (風呂敷) スル (剃る) ノノ (布) ヨロ (夜)

拗音化

越後

せきさ^(関)ハ^(沢) おほつ^(大)か^(塚) しう^(塩)つ^(津)

(明治三年(一八七〇) 四月廿八日 高井時茂讓状案)

現在も新潟県胎内市にある地名「塩津」について「しうつ」と表記された例と思われる。表記の通り発音するならば「シューツ」となるか。「しお(塩)」を「シュー」と言うのは現在では佐渡に限られ、胎内市が属する下越や中越地方では「ショー」と発音されるようである。また、全国的に見ても「塩」を「シュー」と言うのは佐渡のみに見られる。⁽²⁸⁾

以上、東北地方と関東地方の中世東国文書の母音の交替表記については、i と e の交替表記、i と ju の交替表記、i と u の交替表記、o と u の交替表記などが見られることが分かった。これらの多くは文書が伝来した地方の現代の方言にも見られるものであり、中世からこのような言語事象が東国文書の言語に見られていた可能性を示している。

二 子音の交替表記

1 ウ・オ段開拗音の交替表記

前稿では、「越後文書玉翰集」、「中条家文書」中に見られる「所領↓しゆ^(所)りやう^(領)」や、「一緒↓しゆ^(緒)」、「糺明↓

〔凡例〕
けうめひ」のような yo・yu の音が交替した表記について指摘した。このような拗音における交替は、現代の方言では新潟の他に山形の庄内地方、長野県の東北端で見られ、²⁹⁾その他の地域では見られないという。

古文書では以下のような交替表記の例が見られた。

yo ↓ yu

福島

これもていちゑんにちきやうすへした、し女子等ありといへともさい^(在)所^(不定)ふちうなり

大悲山 (三五一建武四年 (一三三七) 十一月廿一日 沙弥明円相馬行胤讓状)

「不定」なので「ふちやう」となるところが「ふちう」となり、ウ段拗音に転じている。大悲山文書は奥州相馬氏の庶子家である大悲山氏に関する文書。大悲山氏は、陸奥国行方郡大悲山村 (福島県南相馬市) を領した。現代の福島方言ではオ段拗音がウ段拗音に転じる例は見られないが、オ段音がウ段音に交替している例はある。³⁰⁾

ユダレ (涎) ユダレカケ (涎掛け)

yu ↓ yo

青森・岩手

申て給ハるへし又いや二郎もとより^(不忠)ふてうのものたるうゑ

南部 (一三嘉元二年 (一三〇四) 五月廿四日 曾我泰光讓状)

右の南部家文書の例では、本来は「ふちゆう (不忠)」となるべきだが、「ふてう」と表記され「チュウ (忠)」が「チョウ」となっている。このようなウ段拗音がオ段拗音に転じる例は現代の青森または岩手方言には見られない。

迫野虔徳氏は「ウ、オ段開拗音の、標準表記とは異った表記は、越後地方の仮名資料に特に目立つもの」として越後以外では長野の古文書にこのウ・オ段開拗音の交替表記が見られるとしている。またその他の地方においてはオ段開拗音がウ段開拗音に交替表記されるとし、下総国の結城氏の家法にも yo ↓ yu の交替例が頻出すると述べている。⁽³²⁾

本稿の分析を通して上記以外に、東北地方文書にもこのようなオ段開拗音とウ段開拗音の交替表記が見られることが分かった。また、迫野氏によればこのような交替表記に関して先述の結城氏の家法では、yo ↓ yu は多く見られるが、yu ↓ yo の表記は一例も見当たらないとし、yo ↓ yu の交替表記は「関東東北地方の文書には少なくともなく、yu ↓ yo の交替表記に関しては越後の古文書に主に見られると述べている」⁽³³⁾。

今回の分析を通して、越後の古文書に主に見られる yu ↓ yo の交替表記例が南部家文書に見られることが分かった。このような例は採録用例数が少なく、現在も用例採録の最中であるので今後更なる類例を見出すことに努めたい。

長音化

以下の用例は前稿の「越後文書宝翰集」中の用例である。本来であれば「しよりやう（所領）」と表記されるところが「しゆうりやう」と yo ↓ yu に交替し、なおかつ拗音の後ろが「シュー」と長音化している例である。

ゆつりわたすしゆうりやう（所領）の事（漢語）

（39 応永十五年（一四〇八）八月十六日 和田時明讓状）

「シヨリヨウ」が「シューリヨウ」のように拗音の後ろが長音化する現象が、幕末の『角田浜願正寺年中故事』にも見られる。『角田浜願正寺年中故事』は、西蒲原郡巻町角田浜にある浄土真宗本願寺派願正寺の日記で、「一緒」という語を「一集（イツシユ）」と書いた例がある。⁽³⁴⁾このような拗音に長音が添加した表記が、幕末から時代を遡って中世の越後の古文書にも見られることが分かる。以下の用例の出典表記は『角田浜願正寺年中故事』方言・民俗

関係語彙索引」(柄澤衛『西蒲原郡方言考』二〇一三年)に拠った。

元々終始「集ニ巡国之凶り有之処、雲公足痛ニて送レ、此節右縁因ニ依て尋被參候 (前九〇—三)

且ツ御講過拙老与「集ニ押付・曾根・並木弟・役僧中参り、茶酒ニ^而実ニ当惑至極 (前一九四—二)

佐渡山^江疱瘡見舞ニ下女遣、饅頭三百文買遣、五人「集ニ致候趣 (前二五一—二)

最早く御堂・庫裏共ニ棟落、小屋雪隠迄「集ニ類焼、実ニ目も不被当、氣之毒至極 (後一四五—四)

拗音だけではないが、次のように長音添加する語の例は現代新潟方言でも見られる。

シヨ³⁵ーヨ³⁵ー(醬油) チョージヨ³⁵ー(長者)

ハ³⁶ー(歯) コー³⁶スギ(こすき) ニー³⁶ワドリ(鶏) クー³⁶ジラ(鯨)

まとめ

本稿では、中世東国文書、特に東北地方と関東地方の古文書に見られる音韻交替表記について見てきた。

母音の交替表記として東北地方文書に i と e 「^へからい^系とま^前へ^へからいとまい」、i と u 「^高し^守もり^下す^下まもり」、o と u 「^本も^馬ま^下む^下むとむま」の交替表記がそれぞれ見られた。また、関東地方文書には同じく i と e 「^乗のりかえ^下のりかい」、o と u 「^郡こ^下ほり^下こ^下ふり」の交替表記の他に、武州文書に i と ju 「^高た^岩かい^下わ^下たかゆわ」の交替表記が見られた。また越後の古文書では「^塩し^津ほつ^下し^下う^下つ(シユーツ)」と拗音化した例も見られた。

子音の交替表記では、ウ段拗音とオ段拗音の交替表記「^不ふ^定ちやう^下ふ^下ちう」などが東北地方の古文書に確認できた。これらは現在の新潟や山形の庄内地方、長野の東北端にのみ見られ、東北方言には見られない言語事象である。

また、越後の古文書では、幕末の文献に見られる拗音の後ろが長音化する「^一緒^下一^集(イツシュ)」例が、時

代を遡って中世の古文書にも見られることが分かった。

以上見てきたように、現代の東北地方や関東地方の方言で確認されるような言語現象が、本稿の分析を通して中世の東国文書にも確認でき、中世からこのような音韻交替現象が東国文書の中に存在していた可能性を示している。

注

- (1) 川野絵梨「越後文書宝翰集」の表記について―色部氏文書・三浦和田氏文書を中心として―（東京女子大学紀要『論集』第六六巻二号、二〇一六年三月）
- 川野絵梨「中世越後女性文書の言語について―『越後文書宝翰集』・『中条家文書』を中心に―」（『ことばとくらし』第二八号、二〇一六年十月）
- 川野絵梨「中世東国文書の言語研究―『越後文書宝翰集』、『中条家文書』の男性文書を中心に―」（東京女子大学紀要『論集』第六七巻二号、二〇一七年三月）
- 川野絵梨「越後文書宝翰集」の言語分析―大見水原氏文書・毛利安田氏文書・上野氏文書・斎藤氏文書・発智氏文書・小田切氏文書を中心に―（東京女子大学『日本文学』第一一三号、二〇一七年三月）
- (2) 『青森県史』資料編 中世1南部氏関係資料（青森県、二〇〇四年）
- (3) 豊田武・田代脩校訂『史料纂集古文書編 第十三回配本 相馬文書』（続群書類聚完成会、一九七九年）
- (4) 『白河市史第五巻資料編2古代・中世』（白河市、一九九一年）
- (5) 『新編埼玉県史』資料編5中世1古文書1（埼玉県、一九八二年）
- (6) 『日野市史』史料集 高幡不動胎内文書編（日野市、一九九三年）
- (7) 村井章介『中世東国武家文書の研究―白河結城家文書の成立と伝来―』（高志書院、二〇〇八年）
- (8) 『かながわの歴史文獻55―神奈川県関係基本史料解説目録―』（神奈川県立図書館、二〇〇八年）
- (9) 金田一春彦「音韻」（東条操『日本方言学』吉川弘文館、一九五四年）
- (10) 安部清哉「日本列島における一つの方言分布境界線―気候線―」（『玉藻』三五、一九九九年九月）
- (11) 安部清哉「日本方言における『南北方言分布』（語彙音韻文法）の特徴」（『玉藻』四七、二〇一三年二月）
- (12) 北条忠雄「5東北方言の概説（飯野毅一ほか編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、一九八二年）
- 飯野毅一ほか編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、一九八二年

- (13) 新潟大学方言研究会「特集・新潟県岩船郡朝日村大須戸方言の研究」(『方言の研究』9号一九八一年三月)
- (14) 加藤正信「11新潟」(東条操『方言学講座第三卷 東部方言』東京堂、一九六一年)
- (15) 登坂勉『随筆風方言集 懐かしい仙田(岩瀬) 言葉』(私家版、二〇〇六年)
- 「い」と「え」の発音について引用して示す。
- 【い】 【え】 の発音は、共通語の「い」とは少し異なり、「イ段の音」に接続する「イ音」を除いて、「い」と「え」の中間音として発音される場合が多い。そこでここではその中間音を「え」と表記する。例：うるし・うるしい(嬉しい)。しろえ・しーろえ(白い)。口の開け方の小さい合口音は「え」で表し、口の開け方が大きい開口音の場合には「ええ(＝ゑゑ)」と表すこととした。また仙田(岩瀬)言葉では、ヤ行音がイ音またはエ音に転訛することが多い。その場合の「え」音の表記の見出しは、【い】の項に収めた。
- 【え】 仙田地方では純粹な「え」の発音は聞かれない。むしろ、「え」または「ゑ」音がよく聞かれる。(後略)
- (16) 本間優美子「新潟県の方言についての記述的研究(7) 特集・新潟県岩船郡粟島浦村字内浦方言の研究@3音声—音韻変化・音韻体系」(『方言の研究』8号、一九七七年十月)
- (17) 飯豊毅一「関東方言の概説」(『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会、一九八四年)
- (18) 注5に同じ。
- (19) 原田伊佐男「埼玉県東南部方言の記述的研究」(くろしお出版、二〇一六年)
- (20) 注9に同じ。
- (21) 本堂寛「岩手県の方言」(『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、一九八二年)
- (22) 児玉卯一郎「福島県方言辞典」(国書刊行会、一九七四年)
- (23) 此島正年「青森県の方言」(『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、一九八二年)
- (24) 注21に同じ。鼻音化字音以外の例としては「ホタロ(蛸)」、「ドウゴ(道具)」、「トヅク(届く)」などがある。
- (25) 『日本のことばシリーズ2 青森県のことば』(明治書院、二〇〇三年)
- (26) 森下喜一「栃木県の方言、杉村孝夫「群馬県の方言」(『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会、一九八四年)
- (27) 大橋勝男『新潟県方言辞典』(おうふう、二〇〇三年)
- (28) 平山輝男編『現代日本語方言大辞典第三卷』(明治書院、一九九二年)
- (29) 注9に同じ。
- (30) 注21に同じ。
- (31) 結城氏新法度。
- (32) 迫野虔徳「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」(『語文研究』二三号、一九六六年十月)

(33)

注31に同じ。

(34)

石山与五栄門、井上慶隆、柄澤衛、奈倉哲三編『角田浜願正寺年中故事 前編』（巻町教育委員会、一九九一年）、同編『角田浜願正寺年中故事 後編』（巻町教育委員会、一九九三年）

(35)

柄澤衛「越後中部方言におけるオ段長音とア段長音の交替現象について」（『ことばとくらし』第十号、一九八六年十二月）

(36)

注13に同じ。

キーワード

中世東国文書、東北地方の中世文書、関東地方の中世文書、母音の交替表記、子音の交替表記